

【アースウォッチ体験報告書】

ヨーロッパ・アフリカ間のナキドリの渡り

(チーム1a)



北海道七飯町立七重小学校 教諭 本間 崇

1、プロジェクトの概要と作業内容

(1)日程

2005年8月1日(月曜日)～2005年8月7日(日曜日)

(2)場所

ハンガリー オクサ湿原

国立公園に指定されており、一般の来園者も訪れる。野生のあさがお、ウォールナッツ・ブラックベリー等の植物、蛙・昆虫等の生き物が豊か。湿地帯であり、雨天後はぬかるみの大きい所もあり、加えて沼の部分はコントロールコース上でも、水深1.5～2mに及ぶところもある。

(3)国別参加者

日本(2名)、イギリス(1名)、アメリカ(4名)、ブラジル(1名)

(4)作業内容とレクチャー

①主な作業内容

- ・ オリエンテーリング(活動目的、コントロールなどに関する方法・留意事項、調査地の概要)
- ・ コントロール(鳥の捕獲や捕獲ネットの点検等)、計測(体重等)、記録
- ・ 捕獲ネットの開閉とネットの番号札の点検や修理
- ・ 炊事等の協力 等

1時間に一度(午前6時～午後9時)、各コースごとに分かれ、地元の学生ボランティアや研究者も参加し、複数人でコントロールを行う。コース別になっている袋に入れ、戻ってから捕らえた同じネット番号の書かれたハンガーに吊るす。研究者がリングの有無とその番号(無い場合には付け、記録する)、羽・テイル・脚等の各部位の色や形などから、種類・性別・年齢を見分ける。腹部・胸部辺りに息を吹きかけ、脂肪や羽の状態を観察・これまでの過ごし方の予測、体重の測定等の結果を全て記録化しリリースする。しらみのあるもの(アルコールなども用いながら取り除く)や弱っている鳥の場合は、ケアを行う。但し、猛暑や雨天等の悪天の場合はネットを閉じ、再開時を待つ。

②レクチャー

- ・ 学生の研究発表(ファームにおける鳥と雛の生育環境について)
- ・ ラベル教授によるレクチャー(湿原や辺りの自然環境、鳥の種類や数の移り変わり、本研究にかかわる各メソッドやアフリカの調査地までの移動経路等)

2、学校・授業、地域への還元をめざした、本プロジェクトで学び、得た体験の共有化のために ～内容と方法～

宿舎にあったポスターに、捕獲禁止鳥類がその罰金別に掲示されていた。研究者によると、「最近、ダメージが大きくなってきた」との説明があった。

本活動は、ユーラシア～アフリカ間の大陸をまたいだ、グローバルな調査研究であり、多くの方がかわり継ぎされている。このように長期間にわたり、同じ場所における活動を続けることは、研究結果の推移やそれをもとにした傾向等、焦点化された検証がしやすいと考える。よって、還元への方策の一つとして、打ち上げ花火のようにイベント的な活動に終始せず、「ポイントを絞り、可能な限り、環境条件を同一にした活動の継続」の効果があげられる。

より具体的に言えば、本活動の中心になった作業は、「捕獲～観察～記録」という一連の流れを繰り返すことにおかれている。環境保全において、その現状・実態把握において大きなウェイトを担うこの「調査～記録」というスパンを地道に続けていく大切さをその方策の二つ目としたい。身近な学習環境の中で問題視・重要視されている課題や子どもたちが興味を深め選択した課題の解決へ近づけるため、また、学校や地域の特色を生かした学習活動を構築するためにも、それをある程度の期間の見通しをもって(年と単位として)計画的に積み重ねていくことにより、学校や地域の財産となり、独自のカリキュラム開発の可能性も広がるはずである。

さらに、これがかかわり支えてきた多くの企業・スポンサー、地域住民、教職員、保護者等の輪の広がりが、また新たなコミュニティを生み、その醸成へと結びつくであろう。三つ目として、コミュニケーションを図りながら、様々な人たちと共働することの価値を生かすことにより、人的・知的な面に加え、物的にも学習環境構成

によい影響をもたらすことと考えられる。そして、その成果を交流し合い、学び合うことにより、より活動を発展できる足がかりとなるであろう。

四つ目として、本調査地におけるボランティアは様々な形で、特に地元の方は自然・生物を大切にし、命の尊さ、また、生死が紙一重である微妙なバランスにある現状を理解し、ごく自然にそれらにかかわり、向き合っていたように見られた。研究者を含め、活動にかかわる人同士もごく自然に接し合っていた姿から、やはり、日本語には直訳はできないこの「ボランティア」という言葉のもつ本来の意味を行動・態度化するまでの情意・内面の醸成を、計画的に進めることは難しいが、学校だけに限らず周りの支えあい・教えあい等のより密接なコミュニケーションが必要であるように考えられた。

3、学校教育におけるアースウォッチでの体験の役割

最終日前日にハンガリー有力紙の取材をうけた。「なぜここで、このような活動をしたと思ったのか。地元ハンガリーの人の環境へのかかわり方をどのように思うか。ここで学んだことはどんなことか。」などの質問を受けた。これまで記してきたような内容の概略を伝えられたと思う。

この他にも、いろいろな活動種を含んでいる本サポートは学校教育においても大変有用になる。何をおいても、「為すことによって学ぶ」ことの大切さは言うまでもない。この度の教員スカラシップは、海外でも取り組まれていることも知った。貴重で、これからの学校教育に大きな価値をもたらす学習材として、世界をまたにかけた活動を国際的なメンバーからなるチームで取り組むことから得た財産を、教師を通じて各方面に還元していくことは、環境に対する前向きさを推進し、ポジティブな態度を与える。

教授の、「無能な人はいない。1回で出来なくても、どんな人でも何回か繰り返すと覚える。」の言葉が印象的で、なかなか頭からはなれない。

学習技術や知識のみではない、自然ににじみ出る態度をもち、地道に続けていく、環境に積極的に働きかけることができる子どもたちを育てていくためにも、未来への夢を膨らませたい。その一つの掛け橋として、また、その夢の実践対象としても、アースウォッチでの体験が果たす大きな役割があると思う。

<別紙 提出資料>

[資料1]オクサ湿原で見られた野鳥の推移(1983~)

[資料2]オクサ湿原及びその周辺地域の概要

[資料3]取材内容掲載新聞

[資料4]各種写真資料